

第118図 保護棟設計図（構造）

昭和52年3月31日の加茂町教育委員会からのこの契約に基づく管理状況報告によると、毎月1回、教育委員会事務局文化財担当職員による定期パトロールの実施、年3回、石室の内外の清掃・周囲の草刈作業を実施したことが報告されている。

なお、平成11年、この保護棟が傷んだため改修を実施した。この工事費見積内容は次のとおり（単位は円）である。

土工	572,400	工事原価	3,614,980
底版工	197,720	現場管理費	12.5%
復元工	2,609,860	一般管理費	13.5
仮設工	235,000	工事計	4,616,000

(勝部 昭)

第4節 保護・活用と今後の課題

赤川の河川改修工事に伴う神原神社古墳の発掘調査から30年、竪穴式石室が移築復元されてから27年もの月日が流れた。その間、神原神社の宮川宮司や地元神原地区住民の協力もあって、古墳の石室は神社境内の一角で大切に守られ続け、平成11年には傷んだ石室保護棟が一部改修され現在に至っている。

振り返ってみれば、雨期を迎えるたびに人命をも脅かす水害の恐怖と闘い続けた地元住民にとつて、赤川の河川改修工事は永年の悲願とも言える大事業であった。したがって、発掘調査により遺跡の価値が第一級であると確認されたとは言え、地元としては神原神社古墳の現状保存は困難と判断せざるを得なかつたであろう。ただ、この古墳が持つ歴史的な意義は非常に大きく、これを後世に伝える手段を検討した結果、石室の移築復元という手法が採られることになったのである。

こうしてみると、移築復元された石室はこの地に神原神社古墳が存在した歴史的な意義を示すとともに、地元住民にとっては赤川の氾濫と闘ってきたひとつの証であると言える。言い換えるならば加茂町の復興に関わるモニュメントである。加茂町の歴史を紐解く時、神原神社古墳は古墳時代のみならず現代史にも名を残す重要な遺跡となった。

移築された竪穴式石室は、実際に使用されていた本物の石材を積み上げて復元されたもので、この石室内部は自由に見学・観察することができるようになっている。いわゆる復元模型とは言えども、このように竪穴式石室の内部を見学できる施設はそう多くなく、地域の歴史を学ぶ上で大変貴重な教材を得たと言える。特に学校教育においては、近年、「総合的な学習の時間」を利用して積極的にその活用が図られており、児童・生徒にとっては格好の学習の場となっている。また、加茂岩倉遺跡の発見以後、町内外の文化財について学習を重ねながら遺跡ガイドを行う「遊学ボランティアの会」が結成されたこともあり、こうしたガイドの力添えもあって神原神社古墳へ訪れる人も確実に増えている。このなかには、自ら歴史や地域を学ぼうとする姿勢で訪れる人も少なくなく、生涯学習施設としての役割をも果たしつつある。このように学校教育・社会教育の場として活用されること、文化財を活かすという観点において最も望ましい形であり、一定の成果を得ているものと言えるだろう。

現在、出雲市・加茂町・斐川町の1市2町は、建設省（現国土交通省）・文化庁より「文化財を活かしたモデル地域」の指定を受け「古代出雲王国の里推進協議会」を組織し、島根県の協力のもと、連携して文化財を活かしたまちづくりを進めている。このなかで、加茂町は神原神社古墳を加茂岩倉遺跡とともに拠点的な文化財として位置付け、広域的な取り組みの中で積極的に遺跡の活用を図っている。地元住民のみならず、全国各地から訪れた人々が様々な事業を通して古代出雲を体験している姿を見ていると、広域連携による様々な事業展開が少しずつではあるが実を結びつつあると言える。

ただ、「まちづくり」という観点での遺跡の活用は、なによりその文化財が地域に根付いているという条件のもとに成り立つ。県外から訪れる人々との交流によって、この地域が活性化していくことは喜ばしいことであり、文化財を通して積極的にこの出雲地域へ人々を呼び寄せる努力は今後も続けて行かなくてはならないだろう。しかし、こうして他の地域から訪れる人々が増えれば増えるほど、地元住民の文化財に対する姿勢が問われていくことになるのではないだろうか。文化財を

人々を呼び寄せるための単なる観光資源にしてしまわないためには、地域住民の文化財に対する理解が不可欠であり、住民に正しく理解されることが地域への愛着や誇りに繋がっていく。これこそ本当の意味での「文化財を活かしたまちづくり」なのであり、地域に根ざした文化財行政がすべての基礎になることは言うまでもない。

我々、文化財行政に携わる者として、様々な機会を通じて多くの人々に文化財と接してもらうことは大きな喜びである。そこで、できる限り多くの人々に文化財を肌で感じてもらいたいと願いながら様々なきっかけづくりを行っている。ただ、こうした施策が地域住民の意識高揚にどれだけ役に立っているかを今一度見つめ直してみなくてはならないのではないだろうか。ますます多様化する住民ニーズに幅広く対応していくことは並大抵のことではないが、我々は文化財行政により一層の広い視野が求められていることを認識し、文化財活用の施策が行政の自己満足で終わることのないよう、常に更なる活用の方法を模索し続けていく必要があるだろう。

神原神社古墳の石室から出土した景初三年銘三角縁神獸鏡は、卑弥呼や邪馬台国を連想させるものとして、今なお色褪せることなく広く注目を集めている。このように、景初三年銘鏡を始めとして重要文化財に指定された出土品に目を奪われがちではあるが、この古墳の歴史的な存在意義を考えるとき、移築復元模型とは言え、実際の石材を使用して組み上げられた堅穴式石室がこの地に残されていることは大変重要な意味を持っている。開発の波に押されて数多くの遺跡が失われて行く中、破壊を余儀なくされた古墳を、どうにかして将来へ伝え残そうとした関係者の努力と英断に敬意を表するとともに深く感謝したいものである。そして、この発掘調査報告書の刊行を機に、水害と闘い続けた住民の努力を思い起こしながら、神原神社古墳の新たな活用の道を開いていきたいと考えている。

(山崎 修)

第8章 総括

神原神社古墳は、島根県大原郡加茂町大字神原字松井原2071番地他に所在する。1972（昭和47）年に発掘調査された結果、狹長な竪穴式石室から多数の鉄製品とともに「景初三年」銘の三角縁神獸鏡が出土し、全国的に見ても重要な前期古墳であることが判明した。

発掘調査着手前には当古墳は、昭和初期の境内整備工事の際に板石が出土したとの情報などをもとに、小規模な円墳で内部主体は箱式石棺の類と推定されていた。加茂町の赤川下流域は1961（昭和36）年・1964（昭和39）年と相次いで大水害に襲われ、甚大な灾害を受けた。そのため堤防の拡幅などの河川改修が行われることとなり、神原神社の移転と本殿の下部にある神原神社古墳の発掘調査が計画されることとなった。

前章まで発掘調査の成果を述べてきたが、ここではその概要をまとめておくことにする。

1. 古墳の立地

神原神社古墳は『出雲国風土記』に「神原社」とある式内神原神社の社地であり、斐伊川の支流、赤川左岸の河岸段丘上に営まれている。標高36mで、周辺の水田面からの比高は約5mある。

当古墳の南側丘陵には弥生中期～後期の墳墓と古墳時代前期の小規模古墳からなる神原正面遺跡、南西丘陵には破鏡が出土した土井・砂古墳がある。なお、赤川の支流、猪尾川を巡ること約1.5kmの谷奥には39個の銅鐸が出土した加茂岩倉遺跡がある（第2章）。

2. 墳丘

調査の結果、推定南北27～30m、東西22～26m、高さ6.9m前後の少し歪みのある方墳であることが判明した。北に向かって伸びる段丘の南側をL字形に掘削して方形台を造成しその上部に盛土を施して墳丘を築いている。そして少なくとも西側から南側にかけて溝底幅1.6m～4.0mの周溝が巡っていた。葺石・埴輪等の外部施設は確認されなかった（第3章第1節）。

3. 内部構造

内部主体は、墳丘のほぼ中央に設けられた狹長な竪穴式石室1基である（第3章第2節）。

墓壙 石室を納める墓壙は墳丘のほぼ中央に掘り込まれた小判形に近い隅丸長方形のもので、上端で南北約7.5m、東西約4.6mある。墓壙は地山面に約1.6mの盛土を施したのち掘り込まれている。

石室 石室主軸の方位は北5度西である。規模は主軸長5.75m、幅は北側1.3m・南側0.95m、高さは北端1.5m・南端1.2mである。底部には断面が浅いU字形になる粘土床が敷かれ、北側が4cm高くなっていた。石室の四壁とも板石を小口積にしており、下方部は木棺の外側に沿うように積み上げ、上方部は内側に持ち送り状に積み上げられている。木棺材は一部しか残存していないが、粘土床の断面形と石室横断面の形状からすると、木棺の断面は正円ではなく、身の方が船底状を呈する扁平なものであったと推定された。したがって、広義の割竹形木棺であっても、厳密な意味での割竹形木棺とはいえない。

石室内中央のやや北寄りの粘土床面には、50×70cmの範囲で朱が認められた。

なお、石室石材の多くは玄武岩質安山岩で、加茂町と斐川町の境の後線付近（大黒山周辺）に見られるものという（第5章第1節）。当古墳から北西約3.5kmの場所であり、比較的近いところから運搬されたものと推測される。

排水溝 石室西側壁最下段の石の下に溝口を設け、西10度南の方向に直線状に長さ6mの石組の暗渠が設けられていた。

埋納坑 石室の解体調査を実施していく過程で、墓壇の東壁中央下部、つまり墓壇内側で石室東側壁控積の外側に土師器5個を納めた土坑が確認された。隅丸長方形プランを呈するもので、長さ160cm、幅40cm、深さ45cm（復元）ある。内部には土器とともに多量の赤色顔料が納められており、分析の結果純度の良いベンガラと少量の朱であることが判明した（第5章第2節）。埋納坑・土器・顔料の意味については不明であるが、石室基底部を作ったのち棺身を据え、遺骸の収納・副葬品の納入などと相前後して行われたであろう葬送儀礼の際に用いられた可能性がある。滋賀県雪野山古墳では、棺内から朱の収納容器と考えられる壺が出土している。

石室底部の敷布 石室最下段の板石を除去したところ、その下に粗目の布痕跡が認められた。この敷布の範囲は南北約6m、東西約1.7mにみられ、石室を構築する最初の段階に敷かれていたことが判明した。このような事例は初見のものと言える（第3章第2節）。

4. 出土遺物

遺物としては、石室天井石の上面から出土した土器、石室内に納められていた副葬品、埋納坑内から出土した土器がある。出土品名と員数は次のとおりである（第4章）。

<石室内>

(棺内)	鏡	三角縁四神四獸鏡	1			
武 器	鉄製素環頭大刀	1、 鉄製直刀	1、 鉄劍	1		
	鉄鎌（残欠共）	36、 矢羽部分漆膜残欠	一括			
農工具	鉄斧	2、 鉄製鉈	1、 鉄鑿	1、 鉄錐	2、 鉄鋤先	1
	鉄鎌	1、 鉄針	2			
その他	棺材残欠	鉄器残欠	木材残欠	朱	木炭	
(棺外) 武 器	鉄槍	1				

<埋納坑>

土師器壺	3
土師器壺	2
赤色顔料（ベンガラ、朱）	

<石室天井石上面>

土師器壺	20以上
円筒土器	17以上
その他の土器片（鼓形器台、高杯など）	

5. 主な遺物の特徴

鏡 「景初三年」の紀年銘を持つ三角縁神獸鏡である。図像の構成は鉢の上下左右に置かれた4個の乳の内側に4体の神像を同一方向から見るように上下に階段状に配置し、その間に4体の獸像を置くもので、同向式神獸鏡に分類されるものである。寸法は、径23.0cm、縁厚1.0cm、鏡面の反りは0.6cmである。

鏡の系譜としては、2種類の画紋帶同向式神獸鏡をモデルに景初三年銘画紋帶同向式神獸鏡と、少なくとも4種類9面の三角縁同向式神獸鏡が造られたと考えられている。神原神社鏡をはじめとする三角縁同向式神獸鏡は、舶載とされる140種類400年前後の三角縁神獸鏡の中での少数派であることに加えて、モデルから離れて三角縁神獸鏡の一種としてその後に繼承されることがない試作段階の作品と言え、三角縁神獸鏡の創出過程を考察する上で重要な位置を占めている(第6章第2節)。

銘文は、図柄の中央上方の乳(伯牙彈琴像)の位置から左行で41字が記されており、次のように判読できた(第6章第3節)。

景初三年陳是作鏡自有經述

本是京(師)杜地口出吏人諸之

位至三公母人諸之保了宣孫

壽如金石兮

なお、この鏡について鉛同位体比測定が行われた結果、馬淵久夫・平尾良光が設定したB及びB'領域に位置することから、中国華南産の鉛であると推定された(第5章第5節)。

素環頭大刀 推定全長92.3cm、刀身幅2.7cmで、かなり大型のものである。環頭は長径5cm、柄間20.7cmで、茎は落とし込み構造と見られる。

大刀 全長83.7cm、身幅2.8cmで、やや内反りの直刀である。切先はふくらがやや張り、関は浅い斜角関である。茎には目釘穴が1孔あり、茎尻は一字文字尻である。柄は落とし込み構造で、把問装具とは別部材により構成されている。

鉄鎌 いずれも有稜系鉄鎌と呼ばれる小型で身が厚く、鎌を持つタイプである。整頭式の典型的なもの31点と刃部が半頭状をなすもの3点がある。整頭式鉄鎌は身部と茎部は別造りで鍛接して製作されたものと見られる。当資料は弥生時代の伝統的な鉄鎌製作技術とは異なる技術により製作されていることから、畿内、その中でも大和南部もしくは山陰南部地域周辺で製作され、当地へ配布された可能性がある。山陰地域は有稜系鉄鎌が欠落する地域であるが神原神社古墳における有稜系鉄鎌の多量出土は極めて特異な在り方を示している(第6章第6節)。

当古墳では、口巻部だけではなく、矢羽根付近の漆膜部分が一部残存しており、矢柄の長さや本矧・末矧部分の構造を窺い知ることのできる貴重な資料であった。鉄鎌群と漆膜資料は70~80cmの間隔をおいて出土しており、この長さが矢柄の長さをある程度反映しているものと考えられる。漆膜には本矧・末矧部分があり、矢羽根は2枚羽根であった。末矧部の一端は鉄粉を薄いたのち黒漆を塗ったものであることが判明した(第5章第6節)。

鉄劍 全長41.6cmで池淵分類の直角闊細長茎式短剣に相当し、古墳時代前期に限定される型式のものである。

鉄槍 全長33.5cmの斜角闊直茎b類(池淵分類)に属するものである。柄は呑口式と呼ばれる

ものに該当する。

その他、農工具として鉄斧・鎌・鑿・鍬(鋤)先・鎌・針が出土している。鉄斧には短冊形鉄斧と袋状鉄斧がある。短冊形鉄斧は小型の縦斧であり、片手で使用するタイプであったと想定される。鎌は、松井分類の直刃短冊形に属する大型のものである。着柄角度は鈍角となり、古瀬清秀が鈍鎌とするタイプに相当する。なお、鑿・袋状鉄斧・鍬先は布痕が見られ、布巻きの状態で副葬された可能性が高い（第4章第3節）。

埋納坑出土の土器 坑内に直口壺2、複合口縁の壺1、複合口縁の壺2が納められていた。在地の土器と見られる複合口縁の壺・壺は諸特徴から小谷式（松山編年）のセットである蓋然性が高く、畿内との併行関係では布留1式に併行するものと考えられる。直口壺は、口縁部の開き方など典型的な布留式の直口壺ではなく、模倣したものと思われるが、非在地的な要素を含んだものと言える。

石室天井石上部の土器 壺と円筒形土器のほか波形器台・高坏が出土している。壺は複合口縁で丸底を有するものと胴部がタマネギ状にふくらみ、そこにタガ状の突帯をめぐらしたものがある。円筒形土器としたものは推定60cm前後のやや裾広がり気味の円筒形を呈する土器で、口縁部は複合口縁である。特殊器台や円筒埴輪に見られるタガ状突帯を貼り付けたものは見られない。円筒形土器には一部に赤色顔料の付着したものが見られた。顔料は外面にのみ認められる。分析の結果、広義のベンガラの範疇に入るものの、朽津（1995）の定義する狭義のベンガラ、すなわち「鉄酸化物を発色の主要因とする赤色顔料」とは異なるものであった。建造物で言うところの「丹土」に近いものであり、埋納坑出土土器付着ベンガラとは異なる性質のものであった（第5章第3節）。

これらの土器は、出土状況から石室天井石の上に土を敷いて平坦にされた場に立て並べられ、何らかの儀式が終了した後その場で打ち壊されたものと推測された。

石室天井石の上部から出土した土器片21点について蛍光X線分析を行った（第5章第4節）。その結果、4点を除く17点は元素がよく揃っており、同じ粘土を使って一ヵ所で作られたものと推測された。

6. 神原神社古墳と出雲の前期古墳

出雲における古墳時代前期は土器型式をもとに次の4段階に分けることができ、神原神社古墳はその第2段階に位置付けられる（第6章第7節）。

第1段階 草田6期とされるもので一部に小谷1式を含み、布留0式に併行する段階である。松江市社日1号墳・八雲村小屋谷1号墳・加茂町土井・砂1号墳などいずれも葺石のない小規模な方墳で、後漢鏡を破鏡として副葬する。

第2段階 小谷2式を出土する古墳であり、加茂町神原神社古墳・安来市大成古墳などがあげられる。長大な堅穴式石室・船載三角縁神獣鏡の副葬など定型化した前方後円墳の要素が導入されるが、いずれも方墳である。

第3段階 小谷3式を持つ古墳として安来市造山1・3号墳・東出雲町寺床1号墳・三刀屋町松本1号墳などがある。墳丘は方墳が主体であるが前方後方墳も見られ、粘土構や砾床などの主体部が加わる。副葬鏡は漢鏡7期の斜縁鏡が主体である。

第4段階 小谷3式末から小谷4式を出土する古墳で、木次町斐伊中山2号墳・宍道町上野1号墳・出雲市山地古墳などがある。この段階に墳丘形態が円墳に変わり、副葬鏡は仿製鏡で福永の新

式神獸鏡である。前期の大きな画期といえ、大和における大王墓が奈良盆地東南部から北部に移動する時期に重なる。半島との交渉に日本海ルートが重要視されたことに連動する変化ともみられる。

上記のように見ると、斐伊川中流域では第1段階で既に小方墳（神原神社古墳の南西約600mに位置する土井・砂1号墳）が出現しており、神原神社古墳被葬者との関連が注目される。また、神原正面北遺跡群では弥生時代後期中葉の墳墓群、古墳時代前期第1段階の方墳が見られ、在地の首長一族の累代の墓をある程度たどることができる（弥生時代後期後葉の墳墓は見つかっていない）。ただし、古墳時代中期の顯著な古墳は今のところ知られていない。

ところで、出雲における前期古墳で注目されるのは大型方墳の存在である。全国各地の傾向を見ると、前期の主要古墳は前方後円墳を中心で前方後方墳や円墳がこれに加わるが、方墳は稀である。全国の辺50m以上の大規模方墳を見ると、前期古墳は京都府山形古墳を除けば安来市大成古墳・造山1号・造山3号など出雲地方の古墳のみである。こうした中で、神原神社古墳は方墳ではあるが、規模について見ると安来市荒鳥丘陵の古墳群より小規模である。ただし、竪穴式石室の規模や副葬品の豊富さなどは一級のものであり、荒鳥丘陵の前期古墳群とどのような関係にあるのか、今後さらなる検討が必要である。こうした出雲地域内における比較検討とともに、全国的な古墳の中での神原神社古墳の評価と歴史的意義の解明に及ぶべきであろうが、ここでは調査成果の報告に主眼をおき、今後の課題としたい。

（蓮岡法暉・松本岩雄）

参考文献

- 本田光子 1996 「雪野山古墳出土の赤色顔料」『雪野山古墳の研究』雪野山古墳発掘調査団
 術津信明 1995 「吉佐山根1号墳及び穴神1号横穴墓における赤色顔料」『平ラⅡ遺跡・吉佐山根1号墳・穴神横穴墓群』一般国道9号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財調査報告書10 島根県教育委員会

あとがき

神原神社古墳の発掘に着手したのは1972年7月のことですから、今年でちょうど30年になります。たいへん遅くなりましたが、ここにようやく報告書を刊行することができました。発掘調査にあたっては、地元の方々をはじめ関係者の皆様には言葉では言い尽くせぬほどお世話になりました。心より厚くお礼申し上げます。

報告書刊行にあたっては、1992年に報告書作成委員会が設置され、内容・執筆・編集等に関する諸事項を折々に検討しながら進めてきました。しかし、関係者はそれぞれに本務をもつ傍らで作業を進めなければならず、今日まで遅延することとなってしまいました。早い段階に原稿を提出していただいた外部の先生方にはとりわけ多大な御迷惑をおかけすることになりました。これはひとえに編集者の責であり、深くお詫び申し上げる次第です。

調査してから年月が経っていることに加えて直接調査に携わった人で他界された方がおられることもあります。報告書作成には困難を極めました。また、20名にも及ぶ各方面多数の方々から御執筆いただきながら、十分な討議を加えないまま編集したために、章・節ごとにそれぞれ多少のずれや重複を生じることになり、一冊の報告書としてはいさか統一性を欠くものになってしまいました。この責もすべて編集者に帰すものであり、深くお詫び申し上げます。

報告書作成中の2001（平成13）年12月29日に山本清先生（島根大学名誉教授）が御逝去になりました。先生には発掘当初から何度も現地に足を運んでいただき、御指導賜りました。特に鏡が最初三年銘三角縁神獸鏡であることが確認され



移転前の神原神社



調査指導中の山本清先生（右端）

ると、関係図面などをコピーしてお送りいただき懇切なる御指導を受けました。また、先生は古墳の保存を熱望する関係者の先頭に立って積極的な保存活動を展開されました。山本先生に報告書を献呈できなかったことは誠に残念でなりません。衷心より御冥福をお祈り申し上げます。

1993年には王仲殊先生（元中国社会科学院考古研究所長）が神原神社古墳を是非とも見学したいとのことで、西鶴定生先生（東京大学名誉教授）の御案内で来県されました。王仲殊先生は中国考古学の第一人者であり、特に日本から出土する三角縁神獸鏡に関する論文も多数あることから、中国のみならず日本においても著名な学者です。渡邊貞幸先生とともに神原神社古墳へ案内し、風土記の丘資料館で景初二年銘鏡を御覧いただきました。そのころちょうど報告書作成準備に取りかかっていたので、その話をすると是非早く刊行してくださいと言われ、即興で漢詩をつくっていただきました。あれからまもなく10年を迎えようとしております。その間に、御同行いただいた東洋史学の泰斗西鶴先生も他界され、ただただ悔いるのみです。ここによるやく報告書を刊行する運びとなりましたので、王先生からいただいた漢詩を掲載して感謝の印とさせていただきます。

このたびの報告書刊行は、事実報告を中心にして現状での資料分析を一応行った段階に過ぎません。今後、さらにさまざまな視点から神原神社古墳の研究がなされることを切に期待します。

（蓮・松）

詠陳是作鏡

名師故土在吳中
亂世流亡至海東
本住京城作明鏡
又來絕地鑄青銅
景初雖屬魏年號
陳是已成倭職工
異國異鄉爲異客
廣傳技巧立奇功

一九九三年七月

王仲殊

写 真 図 版



1. 神原神社古墳と加茂町中心部（航空写真）



2. 神原神社古墳遠景

図版 2



1. 神原神社古墳の墳丘（本殿撤去後）



2. 神原神社古墳（調査前一本殿撤去後の墳丘一）

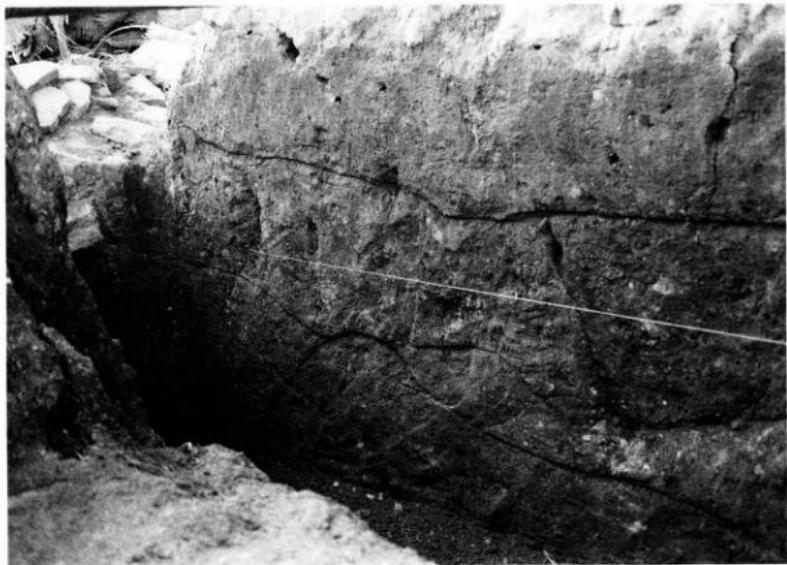


1. 第Ⅲ調査溝調査風景（西から）



2. 第Ⅰ調査溝土層断面（西より）

図版 4



1. 第Ⅱ調査溝土層断面



2. 第Ⅱ調査溝土層断面



1. 第 I 調査溝土層断面

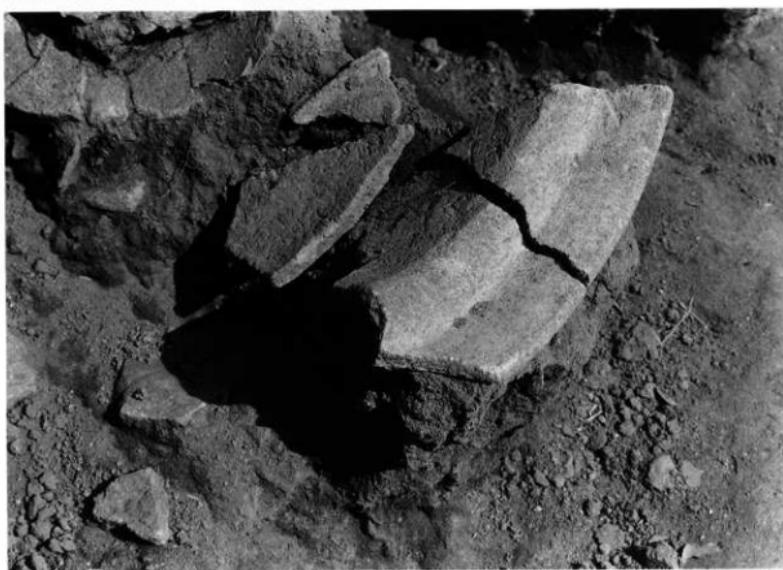


2. 石室天井石上部土器出土状況

図版 6



1. 石室天井石上部土器出土状況



2. 石室天井石上部の土器



1. 石室天井石上部の土器出土状況

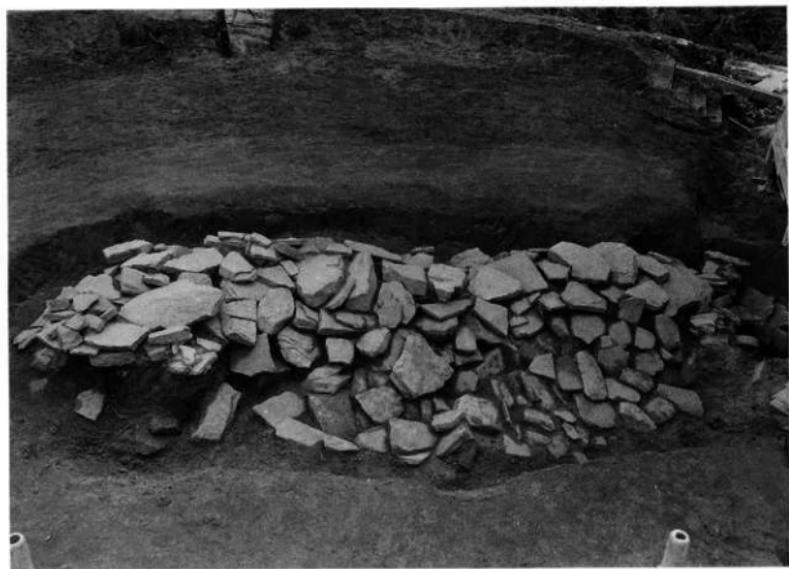


2. 石室天井石検出時の墳丘（中学校後方の丘陵は神原正面北遺跡）

図版 8



1. 積穴式石室検出状況（北から）



2. 積穴式石室検出状況（西から）



1. 積穴式石室実測風景



2. 墳丘全景（北西から）

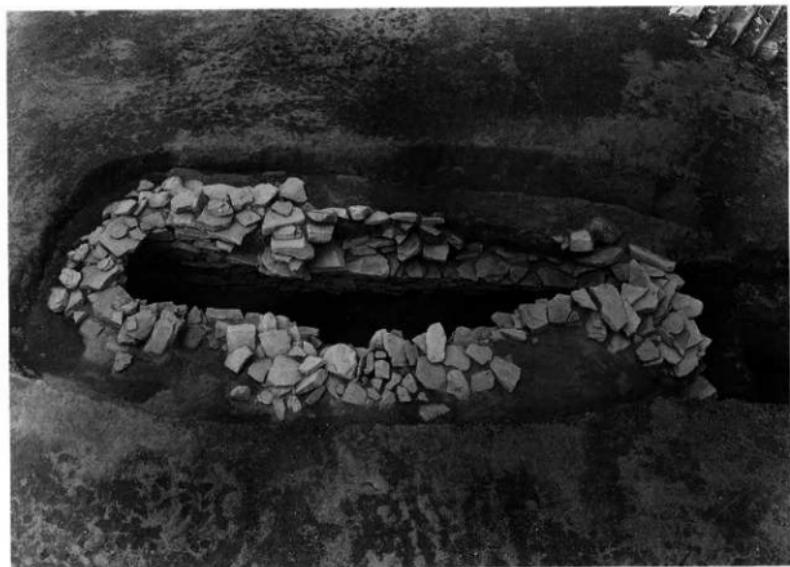
図版 10



1. 天井石撤去後の竪穴式石室（南から）



2. 天井石撤去後の竪穴式石室（北から）



3. 天井石撤去後の竪穴式石室（西から）



1. 穴式石室内部（南から）



2. 穴式石室の北壁

図版 12



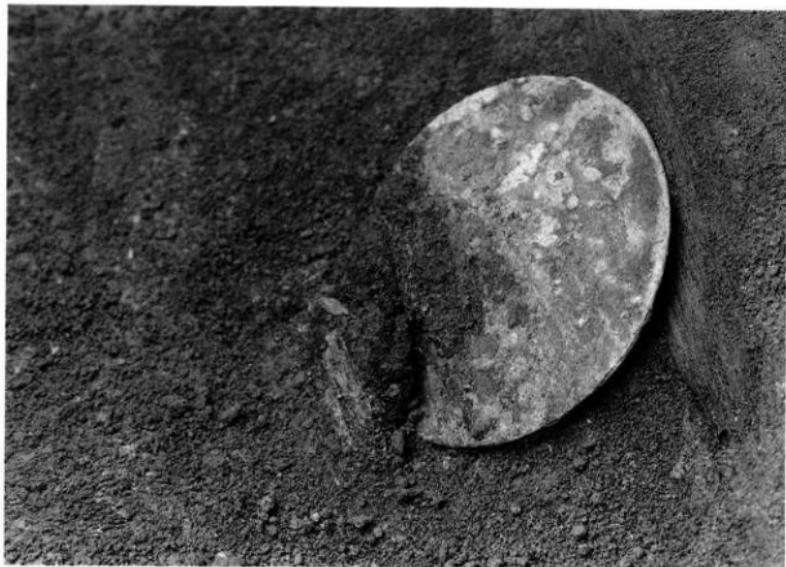
1. 壇穴式石室内部（北から）



2. 鏡出土状況（西から）



1. 鏽出土状況（西から）



2. 鏽出土状況（南から）

図版 14



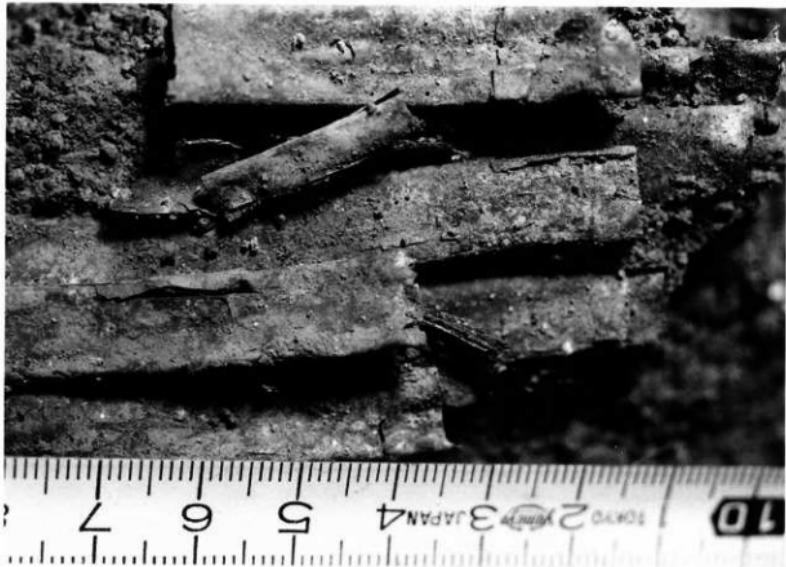
1. 鉄槍出土状況



2. 農工具出土状況

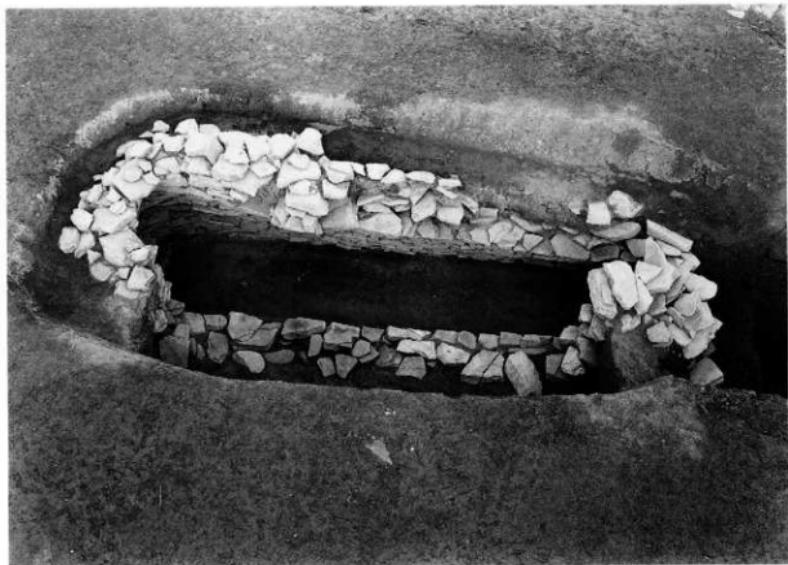


1. 矢羽出土状況



2. 矢羽基部の塗漆部分

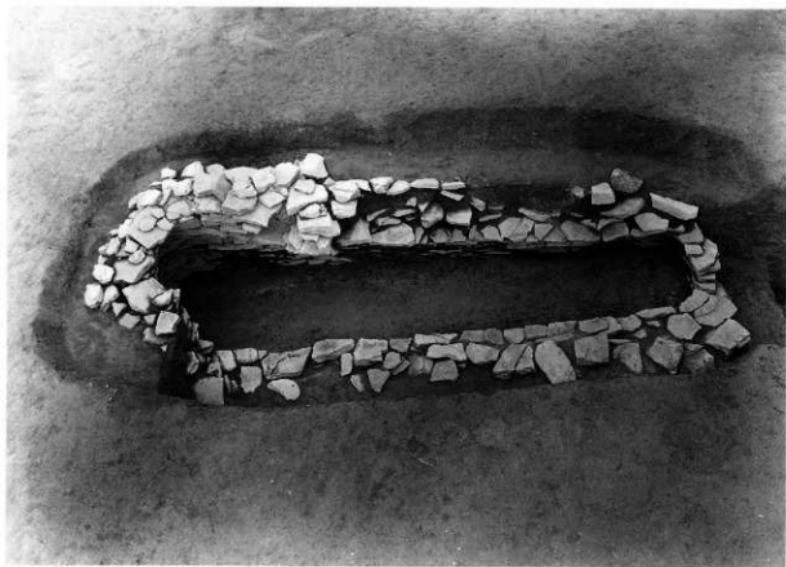
図版 16



1. 壁穴式石室西壁解体状況（西から）



2. 壁穴式石室西壁解体状況（南から）



1. 穫穴式石室の西壁と南壁の西半解体状況（西から）



2. 穫穴式石室の西壁解体状況（南から）

図版 18



1. 穫穴式石室の東壁部分



2. 穫穴式石室の西壁と南壁西半解体状況（北から）

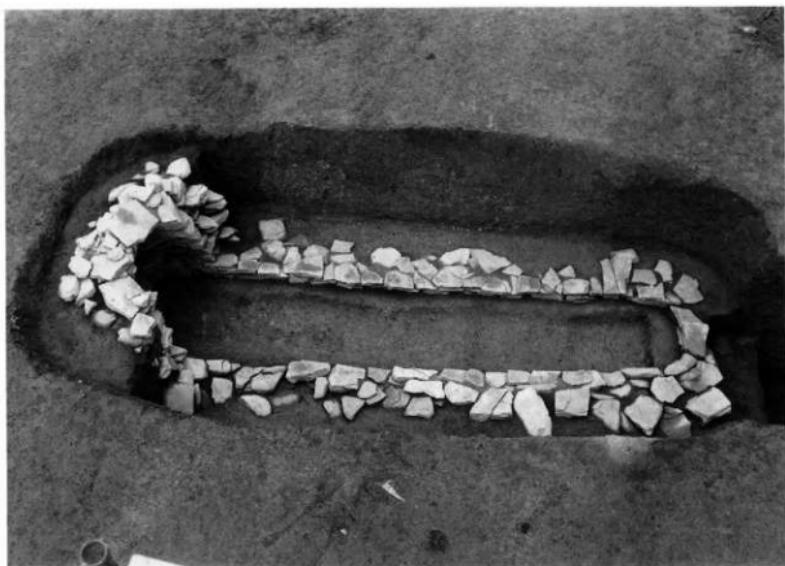


1. 積穴式石室南壁と東壁のコーナー（北西から）

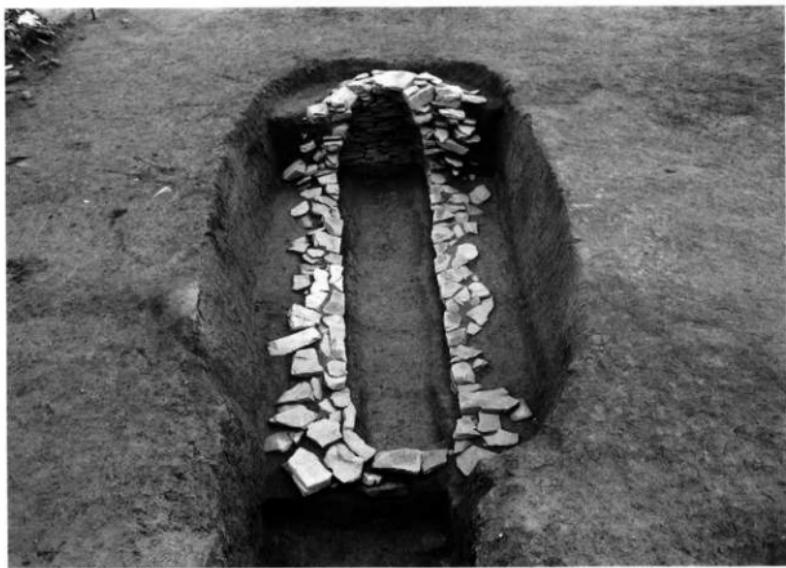


2. 積穴式石室南壁の積上状況（西から）

図版 20



1. 穫穴式石室の東壁・西壁・南壁解体状況（西から）



2. 穫穴式石室の東壁・西壁・南壁解体状況（南から）



1. 穂穴式石室の東壁・西壁解体状況（南から）

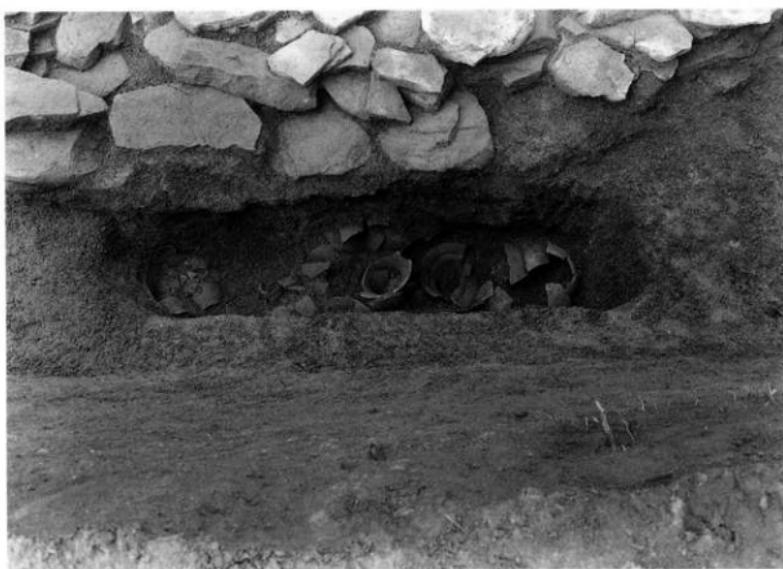


2. 穂穴式石室の北壁と西壁のコーナー（南東から）

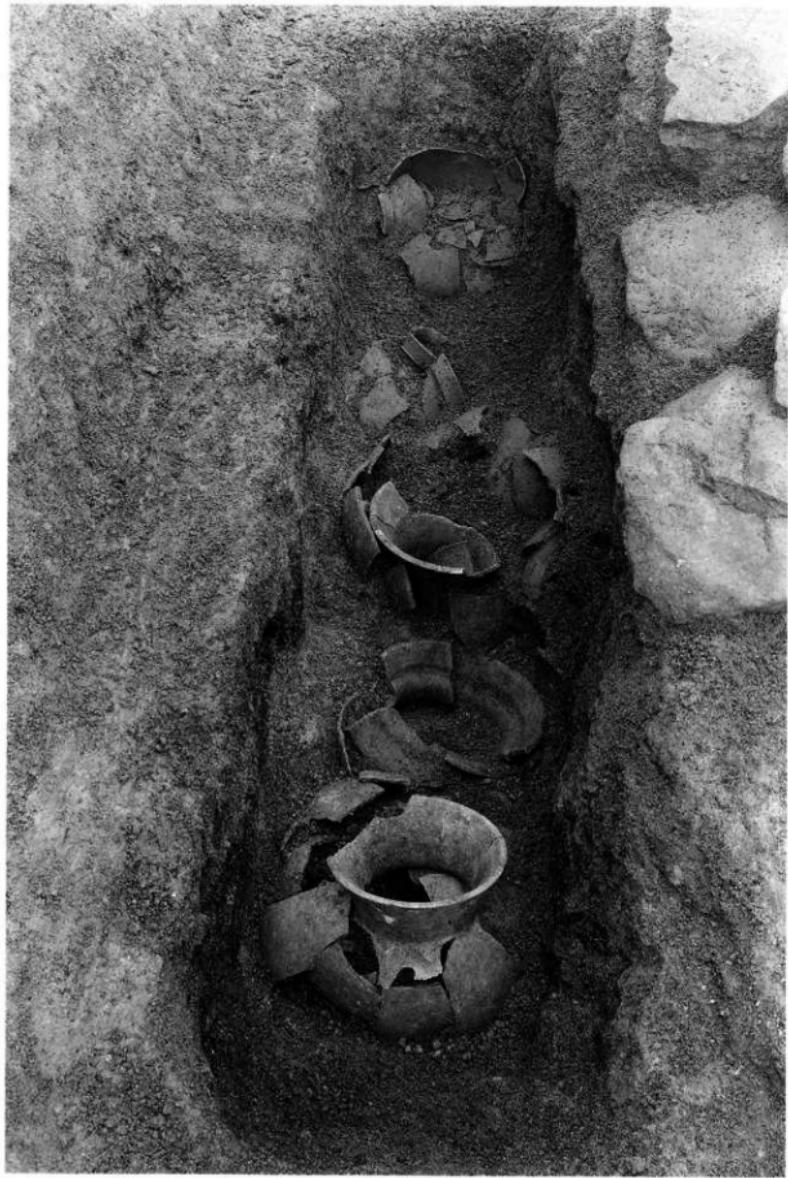
図版 22



1. 壁穴式石室基底部の石と埋納坑検出状況
(北西から)

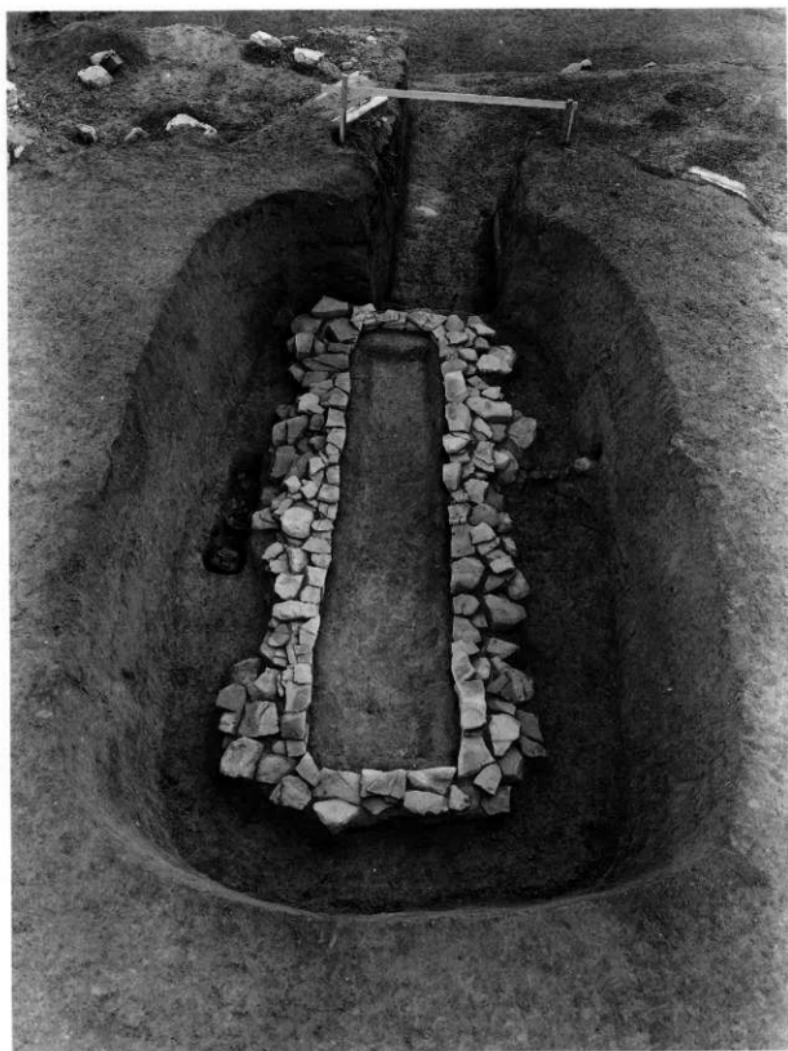


2. 埋納坑内土器出土状況（東から）

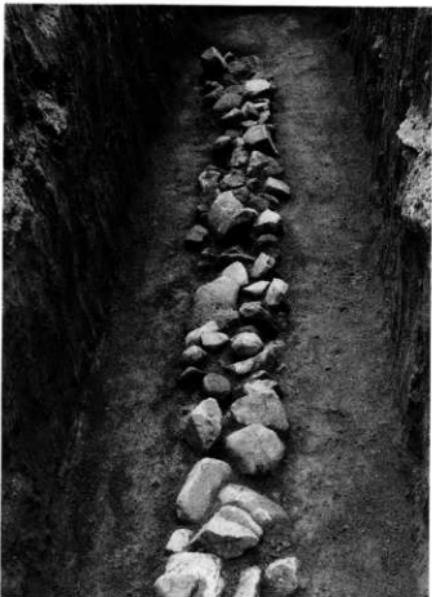


埋納坑内土器出土状況（北から）

図版 24



竪穴式石室基底部と埋納坑検出状況（北から）



1. 排水溝検出状況（西から）



2. 周溝検出状況（南から）

図版 26



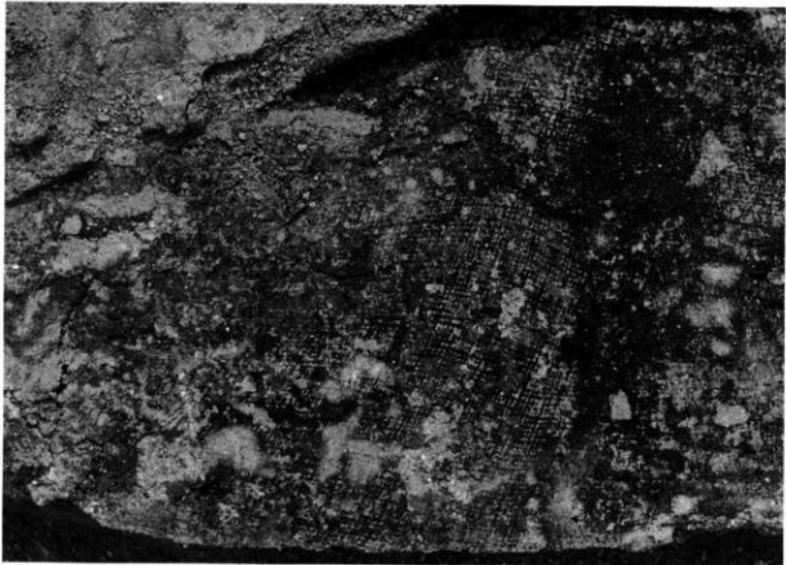
1. 岸溝内の土層堆積状況（西から）



2. 岸溝検出状況（西から）

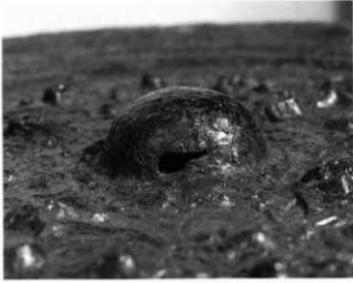
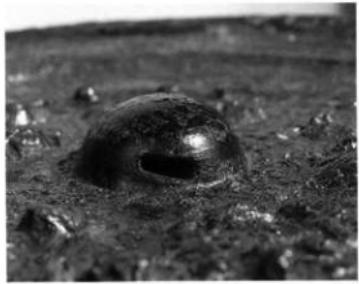


1. 石室底部の敷き布検出状況



2. 石室底部の敷き布（部分）

圖版 28



景初三年銘三角緣神獸鏡

自有經述本是



景初三年陳是

本是京(師)杜地

銘文 (1)



圖版 30

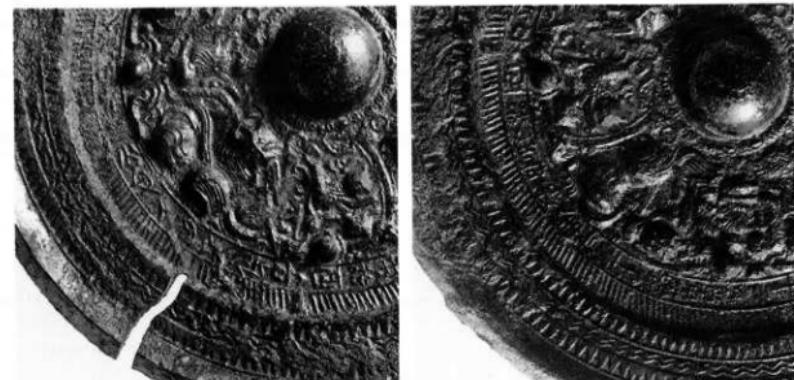
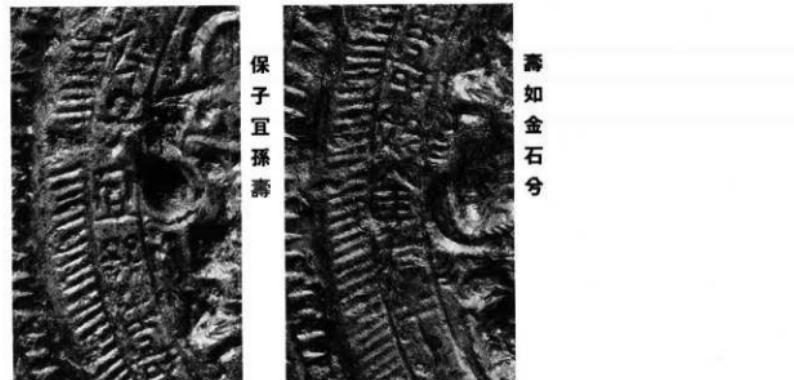
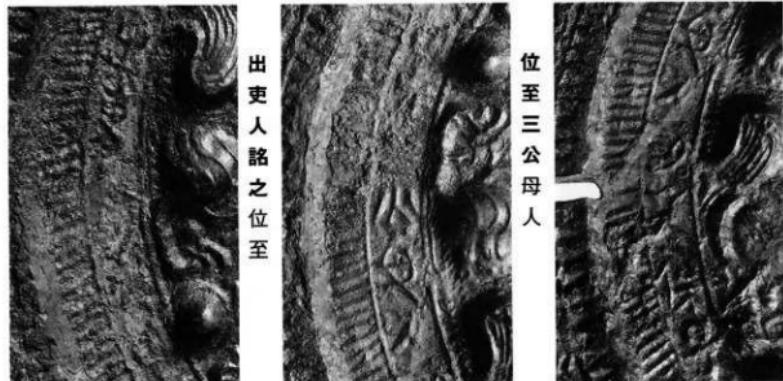
母人詔之保子

位至三公母人

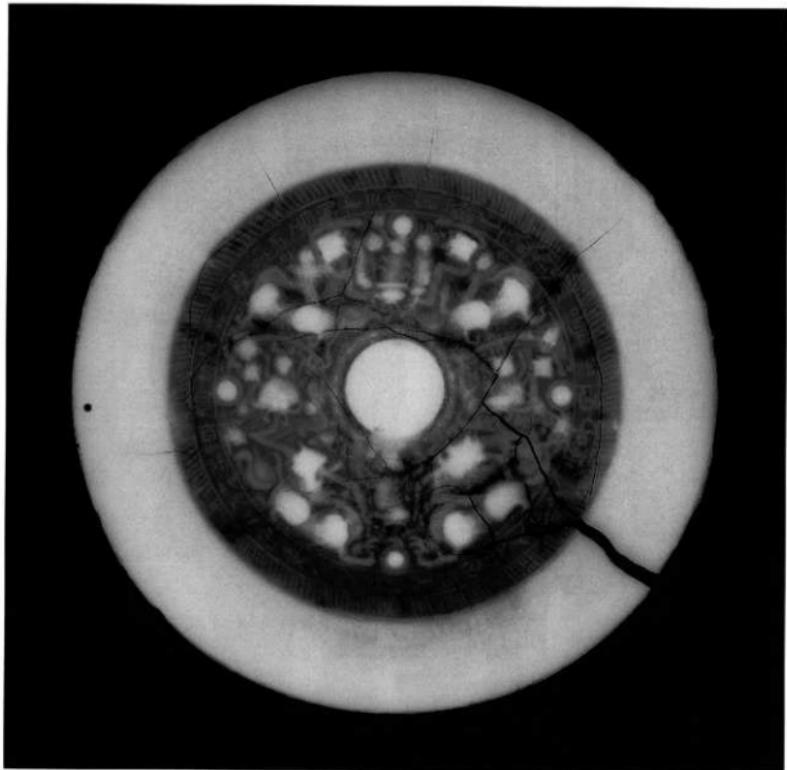
出吏人詔之位至

壽如金石兮

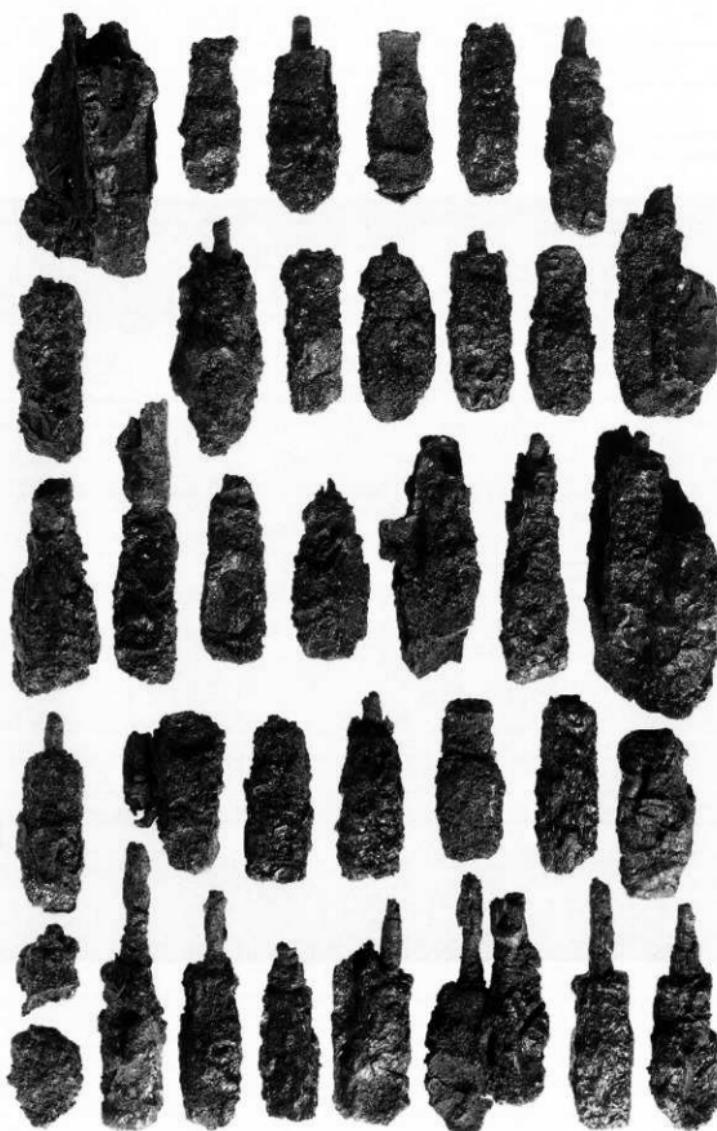
保子宜孫壽



銘文（2）



X線透過写真



图版 32



矢羽付近の漆塗膜資料

図版 34



1. 鉄製直刀

2. 鉄製素環頭大刀



1. 鉄剣

2. ヤリ状鉄器



1. 鑠

2. 錐状鐵器・針狀鐵器

3. 肪